



**Data**

監督・脚本：ファティ・アキン  
 出演：ダイアン・クルーガー／デニス・モシット／ヨハネス・クリシュ／サミア・ムリエル・シャンクラン／ヌーマン・アチャル／ヘニング・ペカー／ウルリッヒ・トゥクール／ラファエル・サンタナ／ハンナ・ヒルズドルフ／ウルリッヒ・プラントホフ

## 👁️👁️ みどころ

移民問題が深刻化するヨーロッパでは、「NSU（国家社会主義地下組織）事件」をはじめ、凶悪なテロ事件が次々と発生！トルコ移民の男と幸せな結婚生活を送っていた生粋のドイツ人女性カティアには、そんな事件は無縁。そう思っていたのに、ある日、くぎ爆弾が大爆発！

本作中盤の法廷劇も見どころ十分だが、本モノのテーマは後半からの復讐劇。朝日新聞は「目には目を」の大展開に批判的だが、さてあなたは・・・？

さらに、邦題に言う「二度決断する」とはどういう意味？そして、予想を完全に裏切る結末をあなたはどう解釈・・・？



### ■□■生粋のドイツ人美女がカンヌの主演女優賞を！■□■

私がドイツ人女優ダイアン・クルーガーの名前と顔をすっかりインプットしたのは、ブラッド・ピット主演の『トロイ』（04年）を観た時。同作で彼女が演じたギリシャ（スパルタ）の王妃ヘレンには、彼女を奪い取ったトロイの2番目の王子パリス以上に私がハマり込んだものだ（『シネマ4』59頁）。さらに、その美女ぶりと演技力を強力に印象付けたのが、クエンティン・タランティーノ監督の『イングロリアス・バスターズ』（09年）（『シネマ23』17頁）。その後の『戦場のアリア』（05年）（『シネマ33』214頁）、『敬愛なるベーターヴェン』（06年）（『シネマ12』277頁）、『マリー・アントワネットに別れをつけて』（12年）（『シネマ29』未掲載）でも彼女の美しさは十分発揮されていた。

彼女はハノーバー生まれの生粋のドイツ人だが、英語もフランス語も達者なため、上記の作品では英語・フランス語で演じていたが、本作は彼女が初めて全編母国語のドイツ語

で演じて第70回カンヌ国際映画祭で主演女優賞を受賞した。そんな彼女は、1976年生まれだから、『トロイ』の公開時は28歳。本作で彼女はトルコからの移民であるヌーリ（ヌーマン・アチャル）と結婚し、一人息子のロッコ（ラファエル・サンタナ）にも恵まれ、幸せな結婚生活を送っている生粋のドイツ人であるカティア役を演じている。2018年の今、彼女は御年42歳。28歳の時の若さに輝く美貌はさすがに衰えたものの、目鼻立ちのくっきりとした西洋人女性特有の美しさは健在だ。本作ではまずそんなダイアン・クルーガーに注目！

## ■ドイツ生まれのトルコ移民アキン監督に注目！■

本作を監督したファティ・アキン監督は、1973年にドイツのハンブルクでトルコ移民の両親のもとに生まれ、ハンブルク造形芸術大学に進学後、映画界で大活躍している人物。『愛より強く』（04年）（『シネマ11』123頁）で第54回ベルリン国際映画祭金熊賞を受賞したのをはじめ、カンヌ、ベルリン、ベネチアの三大映画祭でさまざまな賞を受賞している、44歳ながらドイツを代表する巨匠だ。

パンフレットにあるファティ・アキン監督のインタビューによれば、脚本も書いた本作で、彼は「ダイアンがこんなにも並外れたパフォーマンスを発揮できたのは、ハノーバーで育ち自身をドイツ人だと認識している彼女が、国際的なスターとして活躍しながらも、ドイツ語を話す役を何年も待っていたからだと思っています。ダイアンは母国語での演技を本当に楽しんでいました。いつもの英語やフランス語を話す役柄に比べて、彼女は自分が育った言語で、より自由に自身を表現する機会を得たのです。」と語っている。

そもそも、『ワルキューレ』（08年）でトム・クルーズがヒトラーの暗殺を狙うナチス将校役を英語で演じたことに違和感があった（『シネマ22』115頁）。それと並ぶヒトラーものの傑作である『イングロリアス・バスターズ』で、ダイアン・クルーガーはドイツ人の人気女優でありながらイギリスの二重スパイになっている女性役を演じていたから、本作でやっと彼女は生粋のドイツ人女性の役を演じることができたことになる。さらに、その夫となるヌーリはファティ・アキン監督と同じようなトルコ移民の男と言う設定だから、ダイアン・クルーガーもやりやすかったはず。私は単純にそう思ったが、トルコ移民のヌーリはトルコ人街で在任外国人相手にコンサルタント会社をやり、まっとうな仕事をしていたが、カティアとの結婚前は麻薬を扱っており、その方面の前科もあり、ヤミ社会ともつながっていたらしい。また、熱心なイスラム信者だったから、ひょっとしてヌーリのそんな人物設定は、脚本を書いたファティ・アキン監督が自分自身を想定したもの・・・？

それはわからないが、ヨーロッパでは2016年6月23日のEU離脱を決めたイギリスの国民投票や、2015年11月にパリで起きた同時多発テロに見られるように、近時移民問題が大変な政治問題になっている。したがって、ファティ・アキン監督の本作は、そんな現実問題を真正面から見つめ、問題提起をしたものだ。本作は、ダイアン・クルー

ガーがカンヌ国際映画祭主演女優賞に選ばれた他、第75回ゴールデングローブ賞の外国語映画賞にも選ばれた話題作。そんなファティ・アキン監督に注目！

## ■□■NSU（国家社会主義地下組織）事件とは？本作では？■□■

日本で起きたテロ事件としては、1995年3月20日に起きたオウム真理教による地下鉄サリン事件が最悪のもの。それに対してヨーロッパでは、日本人はあまり知らない「NSU（国家社会主義地下組織）」による連続テロ殺人事件が有名らしい。これは、2000～07年の間に、ネオナチグループがドイツ全土で外国人を排斥する目的で起こした連続殺人事件で、2011年によく犯人たちが逮捕されたものだ。本作のパンフレットには、熊谷徹（在独ジャーナリスト）氏の「ドイツ社会の深い闇・NSUによる連続テロ事件」と題するエッセイがあるので、詳細はそれを読んでもらいたいが、ファティ・アキン監督が本作を監督したのも同事件に触発されたためらしい。インタビューの中で彼は、「トルコに出自を持つ僕はこの事件にとっても衝撃を受けました。ハンブルクで犠牲になった人の中には僕の兄の知り合いもありました。ドラッグやギャンブル絡みの内部抗争を疑い、警察が被害者周辺ばかりに捜査を集中させ、後にそれが大きなスキャンダルとなりました。マスコミもそのコミュニティの人々でさえも、内部抗争が原因であると信じてしまっていたのです。」と語っている。なるほど、なるほど。「家族」と題された第1章の展開を観ていると、そんなファティ・アキン監督の視点に納得。

本作導入部では、カティアがロッコを夫ヌーリに預けて妊娠中の友人ビルギット（サミア・ムリエル・シャンクラン）と一緒にサウナを楽しんだ後、事務所に戻ってきた時に、事務所で起きていた爆破事件に注目！これは一体ナニ？被害者は誰？ひょっとして、私の夫や子供が・・・？そんなバカな・・・？しかし、現場で発見された遺体のDNA鑑定をしたところ、それがヌーリとロッコのものに一致したから、カティアは幸せの絶頂から絶望のどん底につき落とされることに。

しかして、犯人の手掛かりは・・・？カティアはオフィスを離れる時、たしかにカギをかけずに自転車を止めていた女に対して「カギは？盗まれるわよ」「すぐ戻るの」という会話をしたことを覚えていたし、その女の顔もハッキリ覚えていた。すると、犯人はこの女で、爆発したくぎ爆弾が隠されていたのは自転車のボックスの中・・・？そう考えると犯人はあの女で、ネオナチの思想を持ったヤツに違いない。カティアはそう確信し、警察にもその意見を述べたが、レーツ警部（ヘニング・ペカー）は、外国人であるヌーリがヤミ社会と繋がっており、そのために狙われたと考えているらしい。そのため、彼はヌーリの前科に注目し、ヌーリはクルド人か？彼の政治活動は？敵はいないか？等の質問を続けたから、アレレ・・・。これにはカティアの怒りも頂点に達したが、その後、ネオナチの夫婦が容疑者として逮捕されたから、ヤレヤレ。裁判でこの夫婦が有罪とされれば、それなりの極刑が下されるはず。カティアはそう確信したが・・・。

## ■□■中盤の法廷ドラマに注目！■□■

「正義」と題された第2章の裁判劇で、爆破テロ事件の被告人とされるのは若いネオナチの夫婦、エダ・メラー（ハンナ・ヒルスドルフ）とアンドレ・メラー（ウルリッヒ・ブラントホフ）。『否定と肯定』（16年）は、『十二人の怒れる男』（57年）と並ぶ必見の「法廷もの」だが、本作中盤の法廷ドラマも見ごたえ十分なので、それにも注目！

見どころ（論点）の第1は、爆破事件の被害者の遺族であるカティヤが「訴訟参加人」として訴訟に参加できるか否かということ。両被告人の弁護人として、冒頭から「カティヤは証人になる人物なのだから、訴訟参加人とするは認められない」と熱心な弁護活動を展開するのはハーバーベック弁護士（ヨハネス・クリシュ）。その論理は精密だから、一聞したところ、なるほどと思ってしまったが、さて、カティヤの友人であり、本件ではカティヤの弁護人（代理人？）となるダニーロ弁護士（デニス・モシット）は、それに対していかなる反論を？また、5人の合議体で構成されている裁判官はカティヤの訴訟参加人としての権利を認めたものの、その理論構成は・・・？

第2の見どころ（論点）は、この裁判に証人として出廷する、①「私の息子はヒトラー崇拜者だ」と被告人を批判する父親、②被告人たちのアリバイを立証するギリシャ人の男、③目撃証人であるカティヤ、④液体や爆発物の分析をした鑑定人たち、の尋問風景、だ。カティヤは「絶対に法の裁きを受けさせてやる」と誓ったし、ダニーロ弁護士もカティヤに対して「あいつらを絶対に有罪にしてやる」と宣言したが、さて、裁判の行方は？①ギリシャ人の証人が被告人両名のアリバイを証明したことや、②カティヤが事件後に麻薬を所持し、使用していたことをことさら強調したハーバーベック弁護士は、カティヤの証言能力やその証言の価値に疑問を呈し、カティヤが薬物に毒されていないかどうかの鑑定を求めたが、カティヤは断固それを拒否したことは、被告人に有利な証拠になるのでは・・・？

『否定と肯定』でも、スクリーン上に見る法廷劇はさまざまな知識と情報を提供してくれたが、本作でも5人の裁判官が立ったまま判決の言い渡しをする等の新しい発見があるので興味深い。もちろん、最大の注目点は有罪？それとも無罪？ということだが、それはあなた自身の目でしっかりと！

## ■□■新聞記事にみる「復讐劇」への賛否は？■□■

韓国のパク・チャヌク監督の『オールド・ボーイ』（03年）は、ものすごい「復讐モノ」だった。（『シネマ6』52頁）。また、佐木隆三の小説を映画化した今村昌平監督の『復讐するは我にあり』（79年）も、すごい力作の復讐モノだった。しかして、本作も中盤は前述した通りの「法廷モノ」だが、後半からは俄然、復讐モノになっていく。その点について、キネマ旬報5月上旬特別号におけるインタビューの中で、ファティ・アキン監督は「人は復讐心を持っている、と私は思う。そしてほとんどの人が現実の世界でそれを実行するこ

とは間違いだと知っている。ただ映画の中だったらそれができる。映画を見ることによって自分の心にある復讐心が浄化される。それが映画なのだと言っている。それで注目。

そんな本作の復讐劇について賛否両論があるのは当然だが、4月19日付朝日新聞「文化・文芸」は、『目には目を』の映画 いいのか『女は二度決断する』ファティ・アキン監督に問う「テロへの怒り 感情あおる」という見出しで、強烈に本作への疑問をぶつけていたので、ビックリ。編集委員・石飛徳樹の名前によるその記事は、「カンヌ国際映画祭などで高く評価されているが、『目には目を』の思想を容認するような描き方に、記者は違和感を覚えた。来日したアキン監督に疑問をぶつけた。」から始まり、「家族を殺された女性の怒りと悲しみという主題は、今年のアカデミー賞で主演女優賞を得た『スリー・ビルボード』でも描かれている。ただし、その後味は百八十度異なる。果たして芸術で優先させるべきは理性なのか、感情なのか。アキン監督は重要な問いかけを観客に向かって投げている。」で終わっているが、ここまで監督にはっきりケチをつけた記事は今ドキ珍しい。

いかにも朝日新聞らしい記事だが、私はこれには反対で、4月13日付読売新聞夕刊の「テロ 家族失う痛み代弁」の記事や、同日付日経新聞の武部好伸氏（エッセイスト）の評論に賛成だ。また、4月6日付、朝日新聞は、「人生変えるほどの衝撃」の見出しで、ラストは「あなたはどちらを選ぶ？この映画は、もう一つの『決断』を迫る。」と読者の選択に委ねているが、新聞の映画評論としてはその程度で十分なのでは・・・？

## ■□■「二度決断する」の意味は？この結末をどう解釈？■□■

夫が経営するコンサルタント会社の経理を担当していたカティアは機械に強い女で、ロココのために壊れたラジコンを直してやるほどの腕前だった。また、中盤の法廷シーンでは、くぎ爆弾の作り方が詳細に解説されていたが、どうもカティアはそれをすべて理解していたようだ。しかして、本作後半、「被告人は無罪」という予想外の判決を受けて、「上告しなければ・・・」と躍起になるダニーロ弁護士を尻目に、「海」と題された第3章でカティアはそんな特殊能力を最大限に発揮しながら「ある独自行動」に走るの、それに注目！

釈放された被告人夫婦が向かったのは、あのアリバイ証言をしたギリシャ人の店。そんなカティアの読み通り、「海」と題された最終章では、カティアはギリシャ人が経営する海辺の店と、無罪とされた被告人夫婦が浜辺に停めているキャンピングカーに意外に簡単に辿り着くことができた。さあ、そこで問題は、カティアは何のためにそこに行き、そこで何をやるのだが、そこで発揮されるのが女性には珍しいカティアの機械能力。くぎ爆弾はこんなに簡単に作れるの？その起爆装置もこんなに簡単に作れるの？そんな疑問が頭の中を駆け巡るうちに、たちまちカティアはキャンピングカーの車輪の下にくぎ爆弾を入れたリュックを置いたから、あとは二人がキャンピングカーに戻りその中に入れば、起爆装置

のスイッチを押すだけ。そう思っていると、しばらく待つうちに、カティヤは自らリュックを引きあげたから、アレレ……。上告期限が明日中に迫っていることを心配するダニーロ弁護士から「明日は必ず事務所に来てくれ」と言われたことで、カティヤは復讐をやめることにしたの……？そんなことを考えながらスクリーンを覗いていると、本作ラストはあっと驚く結末になるのでビックリ！

本作の原題は『AUS DEM NICHTS (アウス・デム・ニヒツ)』だが、邦題は『女は二度決断する』。なるほど、なるほど。そこでの「二度決断する」は、そう言う意味だったのか……。この点につき、キネマ旬報5月上旬特別号の「REVIEW」では、2人の評論家が「率直に言うところのラストには疑問もある」「厳密には彼女は三度目の決断をしていると思うのだが」とそれぞれの見解を述べている。また、武部氏は「最後の決断を下す時の吹っ切れた表情がことさら印象的だった。」と述べている。しかして、さあ、あなたはこの結末をどう解釈？

2018（平成30）年4月23日記